

わけです。大正三年のことでした。

### 寺をとり出す

ところがお寺の子僧には使うけれど、中学校へはなかなかやってくれないのですよ。やってくれそうに気配もない。だからもう物ねて、ある夜湯前のうちへ逃げて帰ってきました。

夕方、人吉とび出して馬車もありませんし、まして他の乗り物があるはずもなく、トボトボと夜あゝの山の中を歩いて帰って来て、着いたのは夜中の十二時過ぎでした。

そしたら母は何で帰って来たのかとも、どうして帰って来たのかも言わないんです。それには私感心しました。ただ「お来たかね。」と言って真夜中から寝せてくれました。

あくる日になつたら観蓮寺の和尚が追いかけて来たわけなんです。そこで和尚と母親と、兄弟ですとか何か話したのでしょう。私は子供ですからその内容はわかりませんでした。

和尚が帰ったあと、母親が出て来て、「私の頼みだからお寺へ行ってください。」とたった一こと言いました。ほかには何も言いません。

これには今でも大いに感心しておりません。こう言われるともう文句はないですよ。でもまた条件を通そうとしたのではないですけれど、「高野山中学へ行ってくださいか。」と尋ねたら、「じゃ、来年からやろう。」という事になってやっとお寺に落ち着きました。

### 高野山中学に進む

高野山中学へ行くのがねらいだったもので、もうここで五年間一生懸命にやりました。その代わり拝むことも人一倍、働くことも人一倍やりました。とにかく人に負けることが嫌いなんです。しかし、高野山に五年おりましたが、こんなところにおっても人間がダメになると思いました。

何といひますか、ぬるま湯には入っているようなもので、刺激もなければ、ちっとも進取的な、自分でやろうという意欲的なところが周囲に少しもないんです。

### 東洋大学に学ぶ

中学校を卒業したのが関東大震災の直後でしたから大正十三年でしたが、この年に東京へ出て行きました。働きながら東洋大学の哲学科へ通ったんです。哲学はその時分東洋大学が一番よかったのです。あれ程哲学が整っているところは、その頃ほかに殆んどありませんでした。東洋哲学を習ったんですが、何しろ一生懸命勉強しました。

しかし金がない。それで一生懸命に稼ぎました。何でもしたんです。私の信条がどこへ行ってもとにかくやる、やってやっけてやり抜くんだという意欲を持つことなのです。

だから大学へ行ってもありとあらゆることをしました。線路工夫をやってみたり、郵便局の事務員をやってみたりですね。五年間で親からももらった金がたった二十円でした。昔でいう苦学生だったんです。

です。

### 郵便局でアルバイト

私が、正月などの忙しい時だけアルバイトしていた九段の郵便局が一番高くお金をくれたんです。一日一円三十銭もらったのです。大正十四年ですが、その当時日給一円三十銭というのは一番高かったんです。たいてい九十銭でした。それはですね、次のような「特技」が必要だったからです。

あの九段の郵便局の界限には外国の高官がいたんです。ですから、あそこから出る郵便物はですね、その国の言葉で書いてあるんです。だから、イタリア語も知っていかなくてはならない、フランス語も知っていかなくてはならない、ドイツ語も、ロシア語も無論英語もというわけなんです。

それで、この外国語の宛名を見て、これはフランスのどこへ行くんだ、これはイギリスだという区別ができなくてはならないんです。

そういうことのできる人が少ないんです。だから給料が一番いいんです。また、当時はスエズ運河を通すか、パナマ運河を通すかで料金が違っていましたから、郵便物をどちらの運河経由にするかを見わけるという仕事もやりました。器用だったんですよ。

### 女学校の先生を志望

昭和三年ですかね、東洋大学を卒業しましたのが。その頃はですね、世の中が不景気のどん底なんですよ。鈴木商店が

破産した時なんです。不景気で失業者が山ほど出ました。そういう時代に卒業したもんですから、どこも誰も雇ってくれません。

私は大阪で中等学校の先生、特に女学校の先生になろうと思っておりました。それは気が楽だからという事でした。ところが早稲田を出た先輩に、「お前、女学校の先生になるな。女くらしい面倒な奴はおらんぞ、おこれば泣くし、おだてればつけ上がるし、殺せば化けて出るからやめた方がいいぞ。」と諭され女学校の先生は断念しました。

### 高野寺を建立

そこで今度は方向転換して、熊本の田舎に帰って「よし、寺を建ててやろう。」と思ったのです。そして今でも人吉の青井神社の前に立派に残っている、あの高野寺というお寺を建てたんです。とにかく「俺は建てるんだ、寺を建てるんだ」と言ってますね、土地を買ったり、托鉢をしたり、活動写真をやったり歩いたり、もう何でもしました。球磨郡じゅう、熊本県じゅう、たいがい歩いたです。それでお金を集めてあの寺を造ったんです。ですから御開山、ご上人と呼ばれました。

### 北京へ行く

大体寺が出来上がった時分、昭和十二年に戦争になったでしょう。その一番に私は従軍僧、従軍布教師として指名され、そして軍属として北京へ行きました。昭和十二年の九月ですね行ったの

は。辞令、発令がきたのが八月です。その頃は飛行機などありませんから、船で天津へ行って天津から北京には入りました。北京をはじめ、支那じゅう宣撫工作などやりまして足かけ三年おりました。そして戦争が面白くなかったものですからやめさせてもらって帰ってきました。昭和十四年頃に初めて少年法ができたのですが、その時九州では福岡だけに少年保護司の制度ができました。熊本にはまだないのです。その時に一番に私は嘱託少年保護司になって、不良少年の世話をしました。当時そういう仕事をする人は熊本ではたった三人くらいでした。

### 「前向き」が生活信条

今まで苦しかったことは何もありません。それこそ何にもないのです。前向きの人生ですとか、どんなに苦しいことでもやり上げていくことが楽しいのです。難関にぶつかってもそれを難関とは思いません。それに向かって前進していくことが喜びなんです。「来たり、見たり、我勝てり」まさにこの通りですよ。

こういう前向きの意欲のあるところには苦しみはないんです。苦しみというのは後ろを向けるから苦しいんです。だから私が熊本県の方々に申し上げたいことは、是が非でも「前向き」で行くのだという事です。少々悪くてもどんどん進んでいくことだと思えます。勿論人に迷惑をかけてはいけません。

### 大覚寺を再建

私は昭和二十三年、あの戦後の混乱期

### ふるさとの心呼び戻そう

いまとときどき人吉に帰って感じます。これは、若者が少なくなったということですね。それが一つと、それから昔から行われて来たところの祭り、行事、慣習、そういうものがなくなってしまったようですね。

我々の子供時代はですね、色々な祭り、行事があったんです。そういう時にはとっても楽しかったですね。同時に、そういうものによって豊かな人間性というものを作られていきます。ところが今はそういうものがありません。

あるのはテレビだけなんです。そうすると豊かな人間性というものはみじんもできません。これは悲しいですね。ですからやはり、我々はそういう昔から伝承されてきた祭りを復活させなければならぬと思います。

私の言葉で言いますと「ふるさとの心と呼び戻す」というわけですね。やっぱり盆とか、正月とか、彼岸とか、祭りとかそういう行事の復活を図らなければなりません。それが青少年の人間性を作って

### 女人講

昔は球磨郡には女人講というものがあつたんです。今は随分探さないとありませんが……。

村の男は入ることはできませんから女ばかりが集まって、焼酎飲んで、飲めや歌えのドンチャン騒ぎをして、側から見たらバカみたいなものなんです。しかしそれが大切なんです。村中の女だけが寄ってそういう楽しみを持つ、そこにふるさとの心があるんです。

### 熊本県の観光について

私は今の熊本でちょうどいいと思えます。今の状態が一番いいんですよ。いま以上開発したら熊本はダメになりますよ。見ていてください。十年経ったら熊本の本観光が日本が一番良くなりますよ。阿蘇もめちゃくちゃには開発されませんし、あの草野の大平原というのもあのまま残っていきますよ、多少ゴルフ場もありますが、宣伝も今のままでちょうどいいし施設も今くらいでいいということ、そして現在の自然のままを残していつてほしいということ、熊本県にはお願いしたいですね。

それと県政に対しては、さつき言いましたように祭りを復活していただきたいということが一番の願いです。ここ嵯峨の例をあげますと、私はここ

### 自然食

私は今七十一歳ですが、その七十一年間というものの医者にかかったことはありません。

また現代の新しいものは一切食べません。砂糖は食べない、化学調味料は食べない、インスタントは一切食べない、なるだけ自然のままの野菜などを食べるようにしています。私たちは自然の人間ですから。と言って、ご馳走に出されたものは決して断わりませんし残しもしません。しかし自分で要求するのはそういう自然食です。

体は勿論健康です。歯も自分の歯です。歯みがきの粉など使いません、私は塩をういます、塩は天然にあるものですから。薬も調合したのは飲みません。飲むのは千振が羅陀尼助です。